

巻頭言

丁寧に人と向き合う

特定非営利活動法人レスキューストックヤード 代表理事

栗田 暢之

阪神・淡路大震災から13年。今年も神戸市北区にお住まいのTさん宅を訪ねた。Tさんは御年87歳の女性である。震災で灘区の自宅が全壊し、夫のKさんと近くの福祉センターで避難するも、Kさんはもともと身体が丈夫ではないため、不自由極まりない避難所生活から一刻も早く逃れたいと考えていた。しかし頼みの仮設住宅には三度も落選したため、地震から3ヶ月後の4月、Tさんの弟を頼り、愛知県新川町（現：清須市）に引越する決断をした。いわゆる県外避難者となったのである。私たちは、愛知県に越された方々を支援する目的で、茶話会の開催や県内名所の案内などのボランティア活動をしていた。夫妻とはこのご縁で出会った。慣れない土地で隣近所に挨拶するも、「義援金を送った」とのことで、別に自分が直接受け取ったわけでもないのに、被災者を代表してお礼を言わなければならないなど、こうした愚痴を関西弁で思い切り言いあう場として、茶話会は毎回盛況だった。その茶話会をボランティアとして切り盛りしていた当時の大学生を、子どものない夫妻は孫のようにかわいがり、また学生らも慕った。しかし何も特別なことはしていない。一緒にお茶を飲む、時にはお宅に泊めていただいて深夜まで話し込む、こんなひと時がどれほど夫妻の気持ちを和ませたかは計り知れない。この時点で夫妻は「愛知に骨をうずめてもいい」と考えたそうだ。

しかし、それから2年余りが経過した頃、悲劇が襲った。Tさんが風呂場で怪我をしたのである。年金生活者のそんなに新しくもないアパートの風呂場はコンクリート張りに浴槽がそのまま置いてあるようなつくりである。Tさんは背が低いため、浴槽をまたぎきれずに転倒してしまったのである。確かに愛知での生活も慣れてきた。たくさんの孫たちがそばにいてくれる。しかし、これからどんどん老いていく現実を前にした時、毎日の暮らしの限界を悟ったのである。ちょうどその頃、被災地では復興住宅への入居が始まっていた。「帰りたい」。手にしていたパンフレットには「シルバーハイツ」と書かれ、扉はすべて引き戸、緊急の呼び鈴もある。そして風呂の段差もほとんどない。夫妻は再度決意し、神戸に戻ることにした。

1998年7月、孫たちを含めたボランティア20名ほどで引越しを手伝い、トラック2台で神戸へ送り届けた。その後も孫たちの交流は絶えることはなく、時には「ひ孫」も連れて、入れ代わり立ち代り、本当によく通い続けた。Kさんもだんだん見えにくくなる目に目薬をさしながら絵手紙を書き続け、毎月のように孫らに送った。一見順風に見える神戸での暮らしだが、実際にはシルバーハイツの全99世帯がすべて60歳以上である。自治組織も担い手がない。建物の空間に花壇やベンチが備え付けられているが、ほとんど誰もいない。子どもの声はもちろんない。犬の散歩もない。市街地まではバスで30分以上、買い物といえば、下り坂の階段を50段ぐらい降りたところに小さなスーパーが1軒。引越し当初から感じていたことを、先日の再会でTさんがはじめて漏らした。「最初来た時から、姥捨て山だと思っていた」と。

そして昨年の6月、Kさんが逝った。行年82歳だった。生前からの約束で、葬儀は僧侶でもある私が導師を務めた。孫たちもたくさん集まり、悲しさに包まれて最後のお別れをした。これでTさんは一人きりになった。Kさんが健在なら今年は金婚式だったそうだ。こんなにも長く二人で支えあってきた片方を失った絶望感はいうまでもない。そんなTさんに孫たちはますます応援し続けている。Kさんは「震災ですべてを亡くした。でも震災ですばらしい孫たちに出会えた。私たちは世界一幸せだと世界中の人に大声で叫びたい」という言葉を残した。それは13年間この夫妻と「丁寧」に関わり続けている孫たちに対する命の叫びだ。私たちはここに被災者支援の原点を見出すのである。

これは、大勢の被災者のたった一人の命の話に過ぎないかもしれない。しかし、たった一人の事例を手がかりにして、なぜこうした境遇に置かれたのか、今後の被災地で同じ轍を踏まないためにどんな対策が必要なのかなど、「災害科学」がこうした現状の打破に直接あるいは間接的でも役立つものであってほしいと願う。またその成果を被災者なり地域住民に、わかりやすい言葉や行動で仲介する役割として、私たち災害救援NPOの役割も大きいと感じている。しかし、それにはまだ大きな隔りがある。昨年のある研修会で、ある研究者がショッキングな発言をした。能登半島地震の家屋被害調査の報告会である。壊れた家屋をスライドに映し出し、なぜ倒壊したのかを解説されている。そして、「ここのお宅のおばあちゃんにも話を聞いた。ただし、つかまると話が長いので困った」と。啞然とした。丁寧に「家屋」を見るのも大切だが、その前に丁寧に「人」を見て欲しい、と大声で叫びたい。